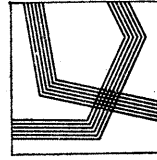


母・子・友



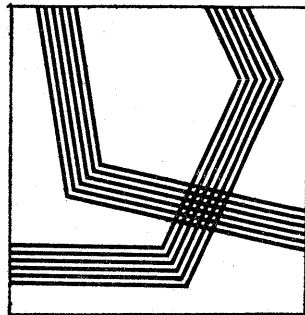
「お山には赤い羽根がいつばいあるよ」と幼な児はうたうごとくに。

友だちと手をつなぎ、くもの巢の下をくぐったり、兎の御馳走を採ったりしながら、石ころ道の列は続く。楽しい語らいの道は山に続く。

へ 草の根に つかまりつかまり登るわれに

母さん荷物と言いくれし

河井 多喜子



吾子は ことし四才。

母親が子どもと共に山に登る

小熊のように四つん這いで登る母

山の土が乾いていても良く滑るし、雨あがりでお汁粉のような泥なら一層つるつるすべる山を、子どもたちは上手に登りおりする。

一番良く滑る箇所、真中のつるつるのところを、立ってスキーのように滑りおりたり駆けおりたりするのを立

ち滑りと言って、子どもたちの間では最高の名誉とされる。

母には至難の技である。頼もしい我が子よ。歩行の不自由な幼児も、私にすすきの枯れ葉を上から差し出して助けてくれる。力強い心の綱である。

葉っぱよ 切れないで……

ようやく登れば一斉に皆の拍手と笑顔が……すすきの穂は白く輝やき、下の方を眺めれば江ノ電がいもむしのように海のそばを這う。帰りには葛の葉など兎の御馳走をかかえてくださる。

いだかれて山に

いだかれて子どもらの群に

からすうり光る 秋の木々の中

みあげれば青空

よじのぼり すべりおりた

あの大きな山肌に

今日おまえは 何を見たのか

母よりも もっと大きな

ふところに

いだかれて はるかに

いだかれて いまおまえは……

身体のあまり丈夫でないひとつぶ種を一心に育てている或る母はよろこび詩う。

「昨日はころげる程、笑ってしまったんですよ」と、まがりくねった木陰の道で、ぱったり出会った笑顔の母が話しはじめた

「ヘルメットかぶった子、僕はいやだなあ あの子はお弁当を食べるのはのろいし、トイレには何べんも行くし、足は細くてつっぱっているし、嫌だなあ」

「あら、それはあなたの事じゃないの？」と母

「ううん（強く否定）僕は。。。。。」自分の姓名を力強くきっぱりと

「それでは、その子は何と云う名前？」

「ヘルメちゃん」

ひっくりかえる程、笑ってしまいましたと、繰り返して、朗らかに笑って話しているその母

いとし子が五才の今日になるまでの涙を秘め心さわやかなその笑顔

右と左に別れて私の眼が沈む。

前日、海からの帰り道、彼と手をつないでいた友だちが「どうしてこんなに足が細いの？」と急に言ったのを思い出した。「だんだんあなたの足のようによく太くて丈夫な足になるのよ」と答えたのだけれど。海で波にも挑戦するし、山にも登るし、何にでも積極的に取り組む彼。嬉しいネ。

へ七里が浜　夕陽ただよう　波の上に

伊豆の山　果てし　知らずも

西田幾太郎先生の和歌を刻んである、かわいい握りこぶしを顔の前にかざしたような、ひそやかな記念碑が小さな砂丘にうずまりそうになって立っている。

三十年程前まで美しい松林の中で子どもたちと、遊んだりお弁当をひろげたりしたそのすぐ先に碑があり波に続いている。

江ノ電も松林の間をゆったり走り、林も海も太陽もこどもらも我も一つに触け合い、今も胸に生きる華麗な思い出のひとつま。

いきいきとした人間、戦争も差別もない生き生きとした世の中をつくるために。自分がおかれた幼児教育の場で、子どもたち母たち仲間たちと手をつなぎ、平和を守る輪をひろげ力を結集する秋こそ今！

(聖路加幼稚園)